

氏名	平野 康之		
学位の種類	博士（リハビリテーション科学）		
学位記番号	博甲第 7814 号		
学位授与年月	平成 28 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	訪問リハビリテーション従事者における利用者の病状変化の気づきに関する研究		
主査	筑波大学教授	博士（教育学）	川間 健之介
副査	筑波大学准教授	博士（保健学）	山田 実
副査	筑波大学准教授	Rh. D	八重田 淳
副査	筑波大学教授	教育学博士	柿澤 敏文

論文の内容の要旨

（目的）

本研究の目的は、訪問リハ従事者を対象に、利用者の急変や病状変化の実態および病状把握に重要なアセスメントなどの現状調査を行い、病状変化の気づきに影響するアセスメントなどの要因を明らかにすることである。また、調査により明らかとなったアセスメントの知識や技術などに関する介入が病状変化の気づきや病態の重篤度判断、緊急対応などに与える影響について検討し、訪問リハの質の向上を図るための研修計画やカリキュラム作成などに資することである。

このため、次の 4 つの研究を実施した。研究 1 「訪問リハ従事者のリスク管理や急変経験の現状調査」、研究 2 「訪問リハ従事者を対象とした単発的なリスク管理実務者研修による介入効果についての検討」、研究 3 「訪問リハにおけるサービス中止者の特性、および健康状態や病状の把握に重要なアセスメントの実態、ならびに利用者の病状変化の気づきに関連する要因の検討」、研究 4 「訪問リハ従事者のアセスメント能力（技能）に関する介入が臨床での利用者の病状変化の気づきや重篤度の判断などに及ぼす影響」である。

（対象と方法）

研究 1 では、平成 23 年度「W 県訪問リハ実務者研修会」に参加された訪問リハ従事者 94 名を対象に、リスク管理の意識やリスク管理に関する機器備品、緊急対応などの内容について質問紙調査を行った。

研究 2 では、平成 24 年度および 25 年度「W 県訪問リハ実務者研修会」に参加された訪問リハ従事者 162 名を対象に、知識・技術に関する習得の程度、緊急時対処の自信、知識技術、緊急時対処

が十分でない理由、リスク管理の問題点などについて質問紙調査を行った。

研究 3 では、全国の病院、または訪問リハ事業所からの訪問リハを実施している理学療法士および作業療法士を対象に質問紙調査を実施し、212 施設、回答者数 387 名から回答を得た。質問紙調査の内容は、回答者の基本属性および訪問リハが中止に至った疾患やサービス提供時における利用者の病状変化の気づき、訪問リハの実践において必要なアセスメントである。

研究 4 では、近畿・四国の訪問リハ従事者 35 名を対象に、研究 3 において得られた結果をもとに作成したアセスメントの能力（技能）向上のための単発的介入を行い、訪問リハの臨床における利用者の病状変化の気づきやアセスメントの実施の程度、重篤度の判断などに与える影響（介入効果）について検証した。

（結果）

研究 1 では、訪問リハ従事者はリスク管理に必要な知識・技術が十分ではない状況にあり、利用者の急変を経験している者が少なからず存在していることが明らかとなった。また、急変時に適切な対応がとれる自信がある者は非常に少なく、その全身状態を評価する機器・備品を必ず携帯していない現状も明らかとなった。

研究 2 では、「利用者の病状把握や急変および病状変化などの対応」を含む単発的なリスク管理研修に参加することは、リスク管理の意識や知識・技術の習得の程度の向上に効果をもたらすことが明らかとなった。また、リスク管理の知識・技術が十分ではない理由、および課題や問題点について、全般的な知識不足がその理由の多くを占め、追加調査では内部障害系や急変に関する内容、利用者の病状変化や急変対応の知識不足が挙げられた。

研究 3 では、訪問リハサービス中止者の主疾患は内部障害系が多く、中止理由は病状の悪化・再発が多いことが明らかとなった。また、病状変化の気づき経験者は約 4 割であり、その内容は、バイタルサインの変動や熱中症・脱水症、循環器疾患の再発や病状変化などが多かった。利用者の健康状態や病状把握に重要なアセスメントについては、バイタルサインや転倒、意識レベルが重要とされ、腹部聴診、心尖拍動触診、心電図変化などの内部障害系のアセスメントはあまり重要とされていなかった。また、職種や経験年数の違いにより、アセスメントの知識度や実施度、必要性の認識が一部異なっていた。利用者の病状変化の気づきに関連する要因は、年齢、訪問リハ経験年数、呼吸器疾患経験、標準的身体所見であった。

研究 4 では、研修の短期効果として、筆記および聴診リスニングテストの得点と主観的評価の VAS の長さが改善することが明らかとなった。長期効果として介入後 6 ヶ月における訪問リハビリテーションアセスメント (VRA) の総実施頻度や病状変化の気づきに対する意識が介入前よりも向上し、介入後の 6 ヶ月間における利用者の病状変化の気づき経験が増加することが明らかとなった。

（考察）

本研究では、訪問リハ従事者を対象に現状調査を行い、「利用者の病状把握や急変、および病状変化などの対応」が解決すべき緊急性の高い課題であることが示された。それを踏まえて訪問リハサービスが中止となった利用者の特性、訪問リハに重要なアセスメント、利用者の病状変化の気づきやそれに関連する因子について全国調査を行った。その結果、訪問リハ従事者が利用者の病状変化や急変に気づき、かつ的確な対応ができるようになるためには、経験を積むことに加え、「内部障害系」およびバイタルサインや意識レベルの確認、視診や胸部の触診、呼吸音の聴診などの「標

準的身体所見」のアセスメントの実施度を高めることが必要であることが示された。また、これらのアセスメントの知識・技術は介入により向上させることが可能であることが明らかとなった。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究により、訪問リハ従事者が利用者の病状変化に気づくために必要な知識・技術、アセスメントなどが明らかとなり、リスクマネジメント能力向上の研修プログラムの一定の効果も示している。これまでも訪問リハの質の向上にあたって、教育や研修などが実施されているが、その効果の根拠を示すものはなく、経験的な側面に基づいた内容がほとんどであった。本研究では、病状変化の気づきに関連する要因および介入の効果を客観的に示し、その根拠を明らかにしており、独自性を有する非常に意義ある研究であると言える。

平成28年1月14日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（リハビリテーション科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。